

日本人最初の海外伝道者・乗松雅休

のりまつまさやす

むくげの会会員、教団宝塚教会信徒 信長正義

1. 乗松と明治学院



○乗松雅休。1896（明治29）年末、単身朝鮮半島に渡り、ソウル、水原（スウォン）を中心に朝鮮人と同様の生活で、経済的には大変な苦労を重ねながら伝道に従事、朝鮮民衆から深い信頼を得た。日清戦争後の反日感情が強くなり、最も日本人が嫌われた時代に、兄弟として慕われた伝道者であった。乗松の墓は本人の遺言で水原に建立され、現在も韓国の「基督同信会」の信徒によって守られている。

○「乗松雅休（1863－1921）は1887（明治20）年1月、横浜で初めて教会に行った。その年の秋、伝道者になるために首藤とともに明治学院に入り、2年余を過ごしたとき、イギリスからブランド宣教師が来日して宣教し、日本橋教会から多くの信徒がブランドの群れに入る“日本橋教会離脱事件”が起こった」【『乗松雅休覚書』（大野 昭。キリスト新聞社、2000年）】（乗松は祖母の弟）。

○但し、明治学院大学資料室にはその在学を証明する資料がない。

…正規の在学証明のない「在学証明」⇒参考資料①

2. 「キリスト同信会」の誕生と乗松の入会

(1)1888（明21）年11月 イギリス人H.G.ブランドの来日（23歳）。約30年にわたって日本・朝鮮で宣教活動。無名。英国聖公会→プリマス兄弟団（プリマスプレズレン）＝異端視されていた。

(2)1889年4月 日本橋教会（日本基督教会）青年7人の教会離脱事件。会堂もない、無牧の集会。その一人が受洗希望。ブランドを紹介され、10月から聖餐が行われる礼拝が始まる。⇒「キリスト同信会」

(3)乗松の入会

日本橋教会⇒北村牧師の辞任後無牧、教会からの離脱者が増加。神学生・乗松が主日説教担当。7人の最年少者・浅田洋次郎（15歳）の父・浅田喜三郎が信者を呼び戻す「勧告委員」。→ブランドと語り合った後その集会に一族を連れて出席。びっくりした乗松は喜三郎と徹夜討論→ブランドに会う（1890年初）

○日本各地の地方伝道・開拓伝道をおこなっていった。⇒参考資料②

植村正久（東京神学大学創設者）は、「プリマスプレズレンはその奇僻なる教義を説き」と言い、異端視し、教会荒らしと呼んだ。『植村正久著作集4』（新教出版社）

3. 乗松の朝鮮伝道の動機

1896（明治29）年12月に朝鮮に渡る。

(1)反日感情高まる当時の朝鮮の政治的・社会的状況

(イ)1876（明治9）年 日本との江華島条約で門戸開放

＊朝鮮からのお米輸出の自由、輸出品に対する関税の免除、日本貨幣の朝鮮国内流通

(ロ)1884（明治17）年 甲申政変＝金玉均や朴泳孝らの急進的開化派によるクーデター。

失敗し、三日天下におわる。金玉均や朴泳孝ら日本に亡命。 のち、朴泳孝は明治学院に入学。

(ハ)1894（明治27）年 東学農民革命および日清戦争

＊東学農民革命（東学農民戦争、甲午農民戦争、東学乱）⇒参考資料③イ、ロ

《推薦図書》『東学農民戦争と日本 ―もう一つの日清戦争―』（中塚明ほか、高文研、2013）

＊ある学者の説によれば日本軍によって殺された農民軍は5万人におよぶという。

(ニ)1895、10「閔妃暗殺事件」。日本の軍隊（京城守備隊）、日本人壮士ら、王宮に侵入、王妃（明成皇后）を殺害する。【日本人の歴史認識が問われる事件】

《推薦図書》『朝鮮王妃殺害と日本人』（金文子、高文研、2009）

(2)朝鮮伝道の動機

(イ)『最初の海外伝道者 乗松雅休覚書』（大野昭）⇒参考資料④

(ロ)『恩寵と真理』（同信社。福田賢太郎「乗松雅休兄記念号」）⇒参考資料⑤

(ハ)○明治学院で朴泳孝と出会った？

朴泳孝は1887（明20）年春、乗松は同年秋に明治学院に入学。⇒参考資料⑥

○新潟県「奇生館」で乗松と朴泳孝が出会う？⇒参考資料⑦、参考資料⑧

二人はこの「奇生館」でたびたび会い、朝鮮の状況や日本人の横暴らを話し合った？

(ニ)『キリスト同信会の朝鮮伝道』（信長正義 むくげ叢書3）⇒参考資料⑨

4. 朝鮮における伝道

(1)渡航直後の状況

同信会発行の資料を総合すると、1896年12月、京城（ソウル）に着き、神戸の米国人歯科医から紹介されていた医療宣教師を訪問すると、小林石松という信者がいた。また、上田貞治郎の紹介で、5月に西宮から移ってきていた織居宅を訪ね、その知人の所有する朝鮮家屋を借りることになった。しかも、小林石松と一緒にいた朝鮮人青年二人が日本語学校の生徒だった。この青年には聖書を語って日本語を教え、彼らから朝鮮語を教えられた。

(2)ブランド夫妻も朝鮮伝道開始

1898（明31）年6月、ブランド夫妻がソウルに到着し伝道を開始する。

その頃の乗松の手紙には、「ただ自分がいかに弱く、いかに無益なものであるかを思い、恥じる

ことが多い」と嘆いている。

○乗松の結婚

1899年6月、乗松は首藤新蔵の姪・佐藤恒子と結婚。乗松は結婚後2か月間、山形や越後地方の伝道旅行に新妻の恒子を同伴している。

○朝鮮において極貧の生活を送る。

(3)水原（スウォン）移住の動機

○1900（明33）年8月 水原に移住（⇒参考資料地図）

イ あまりの飢えのために卒倒したことがあり、ブランドの援助を受けるようになった。このブランドの援助を避けるために。

ロ 乗松がソウルで路傍伝道をしていた時に、水原から来た人が乗松宅を尋ね、水原地方に来てほしいという依頼を受け訪問したことがある。

ハ ブランドと共にするいわば西洋文明のある生活から、もっと朝鮮の人々の中に、その国に土着したかった。それらの人々と生活を共にしてキリストを証したかった。

(4)水原での伝道

李昌民（イチャンミン）親子の強い誘いと援助によって水原地方の伝道に精を出し、その土着化の伝道方針は「この地に自らの骨を埋めようとして朝鮮人になりきること」にあった。⇒浅田洋次郎の書簡から。⇒参考資料⑩

(5)一時帰国、再び水原へ

(イ)1904（明37）年2月、日露戦争勃発 →1905年8月ポーツマス条約で日露戦争が終わると、韓国の外交権を奪って、韓国に日本政府を代表する統監府（後の朝鮮総督府）を置いた。→反日義兵闘争

○1904年11月、ブランド、ソウルでの集会を最後に日本に引き揚げ。

○1905年8月、乗松一家、東京に引き揚げた。それまでの乗松に関する報告⇒参考資料⑪

○1906年初、再び水原へ 「主の日には男子のみにて4, 50名集まり、女子児童等もこれに加わり申候」とある。

●1907年、「リバイバル運動」（信仰復興運動）と称して、最もキリスト教信者が増加した時代。自ら神学校を建て、また大伝道集会が各地で開催され、キリスト教への関心が最高潮に達した時期。

旧約聖書の出エジプト記の物語と滅びゆく自国とを対比して救いを神に委ねる信仰。

(ロ)○1908年2月、妻・恒子は4人の子どもを残し、肺炎で死亡（32歳）。

1909年にキリスト同信会関係者が朝鮮に旅行したときの旅行記に「乗松兄が幼少なる4名の子
女を擁し、万事忍耐の御状況を、今更のごとくお気の毒の感に堪えざりき」。

○1909年7月、宇津木勢八の世話で加藤和子と再婚。

自宅の集会では手狭となり、集会所「聖書講堂」を設立。⇒参考資料⑫

●1910年8月 韓国（1897年に国号を大韓帝国としていた）を併合。韓国は国ではなくなり朝鮮
と呼ばれる日本の領土の一部となる。

○1912年4月 ブランド夫妻参加の水原大集会。4日間の参加者約400人、受洗者50人。

(6) 帰国とその原因

○1914（大3）8月、家族とともに帰国し小田原に住む。

イ 乗松の健康状態。『喜音』「氏の健康は日々に衰えていった。かねて結核をわずらっていた
氏の肉体は、気候不順な朝鮮の、激しい伝道生活には耐えうべくもなくなっていたので、
人々は見かねて日本に引き揚げることを勧め、強要せざるを得なくなっていた」。

ロ 『恥はわれらにほまれば神に一キリスト同信会の100年一』「…乗松としては和子をかばっ
て帰国という一面もあったのではなかったでしょうか」。和子は日赤の看護婦監督を務め
た人で、皇室の誕生に看護婦として立ち会った経験を持ち、また帰国後、大正天皇の即位
の式に皇后陛下に呼び出され青山御所に行ったほどの人。

(7) 帰国後の朝鮮訪問

(イ)1915～1919年の間に4回

1、第1回 1915（大4）年4月 「聖書講堂大集会」にブランドと乗松出席。

その時の出席者170人余、日本人10余人。受洗者21名。

2、第2回 1916年5月 京城聖書講堂。（酒井宇三郎が水原の集会を守る）

在朝日本人に堀佐太郎、人見たか子ら木浦に大規模農園と礼拝堂を建てた人々の名が連な
る。

後に乗松の後継者となる金大熙（キムデヒ）の名も出てくる。

このころ日本で発行された同信会の本やトラクト、讚美歌を翻訳発行しようとしている。

「讚美歌の翻訳に着手し、日々若干ずつ翻訳いたしおり候。金大熙兄翻訳に大なる助けと
便益を得て主の御恩寵を感謝いたしおり候」

また、1917年に堀佐太郎の「朝鮮各地の集会一覧」によれば、4・5人あるいは6・7人の家
庭集会が50カ所になるという報告がある。

3、第3回 1917年5月 13日間

4、第4回 1919（大8）年2月。

(ロ)1919年3月1日 「三・一独立運動」勃発。

乗松はこの運動を目撃する。

「3・1運動は最大の抗日運動」

3月6日の手紙に、当時の状況と乗松自身の態度が分かる文章がある⇒参考資料⑬イ

外国人宣教師が見た状況⇒参考資料⑬ロ

(ハ)日本軍による「堤岩里教会焼打事件」

1919,4,15 「堤岩里教会事件」(日本軍が29人を教会に閉じ込めて焼き討ちした事件)

水原から南西に20kmの距離にある小さな村の事件を外国人が発見して発覚。外国人が発見しなければどうなっていたか。⇒参考資料⑭

5. 朝鮮の独立運動に遭遇した乗松

『恥はわれらにほまれは神に一キリスト同信会の100年一』⇒参考資料⑮イ

『日本の朝鮮支配と宗教政策』(韓哲曦〈ハンソッキ〉 未来社)⇒参考資料⑮ロ

6. 就眠(永眠)

○1921年2月永眠。

(イ)乗松をしのんで⇒参考資料⑯イ、ロ

(ロ)納骨式と記念碑

○1922(大11)年4月、遺言どおり水原に遺骨が埋葬された。

息子・乗松由信の記録⇒参考資料⑰イ

○記念碑には金太熙が書いた乗松の生涯が正面に24字6行で記されている。

(その意味)⇒参考資料⑰ロと写真

○記念碑は朝鮮人によって建立⇒参考資料参考資料⑰ハ、ニ

解放後、朝鮮全土で日本人の碑などはすべて破壊されたが、朝鮮人によって守られたのは救
ライ運動に力をつくした日本人と乗松だけの二つだけとされている。

(ハ)その生涯

佐藤得二(元東大教授で老後に『女のいくさ』で直木賞を受賞した。かつて水原の高等農林に
勤めていた時、雅休のことを聞き資料を集めたが、帰途にカバンを奪われた。1930(昭5)。

⇒参考資料⑱イ

詩人・李烈 ⇒参考資料⑱ロ

○結び 乗松がもう少しアンテナを広げ、社会の動きに敏感であったなら、朝鮮の「キリスト
同信会」という狭い範囲だけでなく、さらに多くの朝鮮人から愛されただろうし、日本人に
よって国を奪われた朝鮮人の苦しみや悲しみを理解することができたのではないだろうか。

【参考資料】

- ① 『福音新報』（昭和14年〈1939〉7月13日、2261～2号）
 「初代の明治学院」（在米 村岡菊三郎）「…級中で聖書通の乗松君と首藤君は出色の聖書通であつが、とうとう神学校で学ぶのはもどかしいとでも考えたか、当時燎原の火の勢いで、各教会を荒らしたプレマスプレズレンに走っていった…」 その他『基督教新聞』等。
- ② イ 「もともとプリマス兄弟団は教職制をとらない平信徒の集まりですが、その中から『もっぱら主のご用をする』伝道者が生まれます。これは必ずしも神学校を出て按手礼を受けていなくてはならないというわけではありません。主の召命のままに伝道に立ち上がるのです。…キリスト同信会の場合、特に初代の伝道者は独立自給伝道が原則で、その伝道の動きに信者が『交わり金』をさし上げて伝道を助けるというかたちを取りました。…英米のミッションが始めた教会とちがい、キリスト同信会は最初から外国ミッションの援助をもらったことも、もらおうとも思わず、ずっと自前で集會し、文書活動をつづけてきたのです」
 『恥はわれらにほまれは神に —キリスト同信会の100年—』（藤尾正人、同信新書）
- ロ 「キリスト教徒中最も頑固なるプリマス・プレズレンの徒また入り来りて、その奇僻なる教義を説き、他派教徒の中にその種を蒔きて、大ひに収穫するところあらんとす」『植村正久著作集4』（新教出版社）
- ③ イ 2004年韓国国会で制定された「東学農民革命参加者の名誉回復に関する特別法」第二条(定義)
 「東学農民革命参加者というのは、1894年3月に封建制度の改革のために第一次蜂起し、同年9月に日帝から国権を守護しようと第二次蜂起して抗日武装闘争を展開した農民中心の革命参加者をいう」
 第一次は、封建制度の改革を求め、第二次は、7月に日本軍が朝鮮王宮＝景福宮を占領して親日政権を樹立し、日清戦争を朝鮮の地で始めた日本軍に対抗する「抗日闘争」。
- ロ 参謀次長・川上操六（参謀総長は天皇）から仁川の兵站部に送った電文「東学党に対する処置は厳烈なるを要す、向後悉く殺戮すべし」（1894. 10.27）【日本防衛庁防衛研究所所蔵『南部兵站監部陣中日誌』】
- ④ 『最初の海外伝道者 乗松雅休覚書』（大野昭）
 「…乗松雅休が政治的に反動保守勢力に対抗する意識で渡鮮(ママ)を決意したとは考えられない。その抱いていた終末的信仰理解と敬虔なエトスはとても政治世界に向くものではない

し、事実その後の行動も決して政治的ではなかった。ただ彼はそのような形で信仰者青年を殺害する禁制の国に福音を述べ伝えたいと願っただけであろう。状況は甚だ厳しくはあろうが、隣国の友として福音を語りたかっただけである」

⑤ 『恩寵と真理』（同信社。福田賢太郎「乗松雅休兄記念号」）

「日清戦争後、朝鮮に何か悲惨な事件が起こった。それを知った乗松兄は非常に心を痛められた。同兄の心は政治的、民族的に責任を感じるとか、同情するといった表面的なものではなく、朝鮮の人々が神の愛を知ることによって、真の幸福の生活に入るののであれば、問題の解決にはならないと感じたようである。

『人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらされた父なる神』に励まされ、導かれて、何人にも頼らず、ただ神に信頼して朝鮮に渡られたものと思われる」。

⑥ 朴泳孝（박영효<パクヨンヒョ>）：1861～1939。 生まれは水原。

『韓国民族文化大百科事典 9』（韓国精神文化研究院）

…그러나 청국군의 즉각적인 개입으로 정변이 삼일천하(三日天下)로 실패하자 일본으로 망명하였다. 그뒤 본국정부의 집요한 송환기도와 일본정부의 냉대로 1885년 미국으로 건너갔다. 그러나 그곳 생활에 적응하지 못하고 일본으로 되돌아와 야마자키(山崎永春)로 이름으로 고친 뒤 명치학원(明治學院)에 입학, 영어를 배우면서 미국인 선교사들과도 친분을 맺었다.

(訳：…しかし清国軍の素早い介入で政変が三日天下で失敗すると日本に亡命した。その後、本国政府の執拗な送還の企てと、日本政府の冷遇で1885年に米国に渡った。しかしそこでの生活に適應できなくて日本に引返し、山崎永春という名前に変えたあと明治学院に入学、英語を習いながら米国人宣教師と親交を深めた。)

【明治学院英語科卒業】は1888（明21）年（『韓国近代人物百人選』（東亜日報））。

（1910年の日本による韓国併合後には侯爵となり、日本統治下の朝鮮における要職を歴任した）

⑦ ○1894. 3に金玉均が上海で暗殺される。

後藤象二郎・福沢諭吉らは越後の小高村の土田橘十郎の私塾「奇生館」に朴泳孝をかくまった（『ブランドさんとその群れ！』藤尾正人）。

⑧ 「それに乗松さんは朝鮮へゆく前に新潟県三条在の豪農・土田家に滞在して伝道しています

が、そのおなじ土田家に朴泳孝という朝鮮の内務大臣をつとめ、のち貴族院議員にもなった親日派の巨頭が亡命していて、彼から直接聞いた閔妃事件の情報は、ふつうの日本人よりはるかに正確に耳にしたと思われまゝです。いや事の真相は日本人には知らされなかつただけ、乗松さんはこの事件を深刻に受けとめたと思うのです。そしておごり高ぶる日本人と、傾きゆく国運を嘆きつつ、経済的にも精神的にも疲れはてている朝鮮の人たちに福音を伝えようと海を渡ったのでしょう。『恥はわれらにほまれは神に一キリスト同信会の100年』

⑨ 『キリスト同信会の朝鮮伝道』（信長正義 むくげ叢書3）

「私はこれらの動機の底流にあったものは、彼が尊敬するブランドの日本伝道ではなかつたかと思う。ブランドが単身で日本に来て、言葉もわからず、何の援助もなく、ただひたすらイエスの言を語り、多くの信者を得た。乗松自身もブランドの群れの一員としてブランドを見つめて来たし、伝道者として立っている。

このブランドの日本伝道に倣って彼は外国伝道を志したものと思う。それが朴泳孝や上田貞治郎から聞いた朝鮮であった。そして自分とブランドとが重なり合つたと言えるだろう。と同時に、貧しい人々や虐げられた人に対する鋭い良心と感性を持ち、強い痛みを憶える人ではなかつたのだろうか。このブランドの群れの伝道者は組織を持たず、従って資金力も無いまま地方、特に東北や越後の地方伝道に出かけ、そこに暮らす農民たちの苦しさを自分のものにし、一層貧しいであろう朝鮮の農民に思いを馳せたと思われる。従って、彼には政治的なものは全くなく、より貧しい人々、より苦しんでいる人々に、ただ自分の信じる福音を語ろうとしたのではないかと思われる」

⑩ 「筆者（浅田洋次郎）はこの年の冬に（1903年）、浅田又三郎兄と共に朝鮮を旅せしが、ある夜、水原の乗松兄の寓居を訪ねて感動せり。衣服も、食器も、悉く朝鮮式であるのみならず、その頃4・5歳の由信さんが、朝鮮語の他には語らざるを見て、乗松兄は愛するお子さんに朝鮮語のみを教え、日本語を教えなさらぬを知りて驚けり。これ乗松兄が朝鮮伝道の祝せられたる理由の一つと思えり」（『先輩兄弟ら一明治編一』同信社）。

⑪ ソウルに住んでいた栗原包太郎の「感話」。「明治37年日露戦役の初めです。私は東京で教会にも行きましたが心から信ずる気になれません。ところが乗松兄と交際して、家庭の様子から日々の生活を見て、初めて真面目に福音を聞いてみる気になりました。乗松兄は決して信仰を強いられませんでした。たしか明治38年であつたと思う。乗松兄が朝鮮を立て日本に帰られる時、水原で送別の会がありました。日本人で集められた者は私一人でした。他はことごとく朝鮮人で、20里30里（日本の2里3里）の遠方から草履ばきで集まってくる。朝鮮

の兄弟らは涙を流して別れを惜しんだ。之を見て、私の心は非常に動かされました。明治37・8年の朝鮮の有様では、ほかに日本人の帰国を惜しむようなことはない。…多数の朝鮮人が水原の停車場に集まって、涙を流して乗松兄に別れを惜しんだには、感動せずにおれませんでした」（『喜音』259号、1969, 9）。

⑫ 「水原集会所の土地は金泰貞兄が寄付せられ、兄弟らが金銭、もしくは物資の寄付をせられ、あるいは労力をもってして、8月2日から建築に着手し、40余日にして大集会に間に合った。場所は水原の有名な華虹門の前に見て…」

⑬ イ 乗松の手紙より 「李大王殿下（高宗）の国葬前後に、朝鮮人の中には不穏騒擾のことなければよいがとは、だれしもおもしろいようであったが、一日に大漢門前、その他のところにて、独立万歳など叫び、不謹慎の軽挙妄動をなす群れもありて官憲の方にてても心を勞し、鎮撫に従事せられし状態ゆえ、今日福音の書き物など配布することは、いかがやと多少懸念なきにもあらざりしが、信仰と善き良心を以て主のみ名を言いあらわし、福音のまことのみちを伝うるにおいて、さらに臆すべきにあらざるをもって、福音書冊を分与せしに何らの妨げなく…。ご葬儀のあとにもなお不穏の挙動をなす人々もあり、また男女学生の拘留せられしもの少なからず、彼らは一部の人々の教唆するところとなりて、年少客気にまかせ、不謹慎の行動におちいりしことなるべし。気の毒なる次第…」

ロ 閔庚培『韓国キリスト教会史』（金忠一訳、新教出版社）「この独立運動は、宣教師たちには驚きそのものであった。誰もがそのようなことを期しなかったばかりでなく、韓国人がそのような大事をなす能力があろうとは夢にも考えられなかった。手には何も持たず、拳だけをギョッと握りしめて抵抗もしない白衣の民族が（日本の）ありとあらゆる暴悪な残忍のために倒れていく姿を眼前に見ながら、また、無差別乱射の弾に当たって倒れていくといったことが、今日も明日も、この国の至る所で行われていることを知りながら、何もできないとは、気も狂わんばかりである」

⑭ 堤岩里教会事件（インターネット）「最近発見された当時の朝鮮軍司令官・宇都宮太郎の日記によれば、『事実を事実として処分すれば尤も簡単なれど』とし『虐殺、放火を自認することと為り、帝国の立場は甚だしく不利益』となるという判断から、幹部と協議した結果、『抵抗したるを以て殺戮したのとして虐殺放火等を認めることに決し、夜には散会す』とある」。

⑮ イ 「1919年3月1日に朝鮮半島で独立運動が勃発します。日本では『万歳事件』などといって小

さく扱っていますが、全朝鮮半島をゆるがす反日運動でした。たまたま乗松さんがソウルにいて、いつものようにトラクトを配ったり、福音を伝えるだけでした。欧米の宣教師が独立運動を支援したのにくらべ、乗松の態度は生ぬるいと批判できますが、彼は日本帝国主義に反対しませんでした。お先棒もかつぎませんでした。朝鮮総督府から機密費をもらって伝道していた組合教会の渡瀬常吉牧師とはわけが違います」

□ 乗松が3・1運動時に書いた『福音時報』（1919.10.10号）「血を流しし罪」と題する文章の内容を紹介しつつ、「ここには3.1独立運動の膨大な死傷者、とくに自らが20年近くいた水原の堤岩里虐殺事件で流された、非道の血について何らの言及がない。乗松とその群れの信仰は、基盤を日常の平安を望む小市民階層に置き、自らをむなしくし、キリストを唯一の支点として、懸命に生き抜こうとする純粋な正統的信仰であるが、差別に抗し権力に抗する、はげしいキリストの一面への信従には消極的な、求心的内的な信仰であった。したがって、上なる権威にさからうことは神の定めにもとることであり、体制に抗して闘う社会運動、独立運動などは、全く思いもよらぬことであった。こうした乗松にとって、昨日までのおとなしく従順な朝鮮人を、はげしく一変させ、爆発的に朝鮮全土に広がっていく3・1独立運動は、危険極まりない軽挙妄動としかうつらず、一部過激分子の教唆によってなされているとしか理解できなかったのであった。これは天皇への素朴な崇敬心を持ちつづけ、膨張を続ける明治国家に、声高な意義申立てもなく追従していた、平凡な一国民としての明治人乗松の、当然の限界であった」

⑩ イ 臨終に間に合わなかった金大熙は「キリストの愛に励まされて、乗松兄は朝鮮の人を愛しました。世の中には英国人になりたい人たくさんあります。米国人になりたい人たくさんあります。けれども乗松兄は朝鮮の人になりました。この愛はいかなる愛でありましょうか、…死ぬまで朝鮮、朝鮮といって天へ往ってしまった…。そして骨壺に入りきらなかった乗松の骨片を灰とともにすべて持ち帰ったのである。

□ 小田原での火葬場での様子。『先輩兄弟ら（大正編）』「そのいのちも、骨まで朝鮮の人々のために与えんとした日本人と、その日本人の骨までもらいたいという朝鮮人と、まことに不思議な光景であった。そもそも乗松兄の病あつしと聞くや、朝鮮の兄弟ら、はなはだ憂い『いま一度乗松兄を見たし、いま一言多年の恩を謝したし』と願うもの多く、ふつうの朝鮮人も『かくまで朝鮮人に慕われる日本人は、そも何者であるか、日本人が日本に帰って病んでいるのに、多数の朝鮮人がわざわざ朝鮮から見舞いに行きたいとは。人間と生まれてかくのごとく敬慕することを得ば、名誉も財産も何もいりません』と感激したという。朝鮮で死んでも

遺骨は日本に持ち帰る人が多いのに、日本で死んで遺骨を朝鮮に葬る乗松兄のごときは、おそらく前例のないことであった」。

- ⑰ イ 「大正11年4月14日。快晴。萬花薫る朝、華虹門内の聖書講堂から朝鮮式の葬列で、朝鮮信徒に担がれて華虹門外光教里の松林にある墓地に運ばれた。すでに三メートル位深く掘り、真白き朝鮮紙を敷かれた墓穴におろし、コンクリートで周囲をかこまれた処に葬り、朝鮮式の土饅頭がつくられた。墓前に『在主故乗松雅休兄姉記念碑』が建てられ、感謝祈祷、讚美が主にささげられた」。

ロ 「生きるも主のため、死ぬるも主のため、始め人のため、終りも人のため、その生涯まごころをつくして愛し、おのれ主の使命を帯びて、その一切の所有をすて、夫婦同心、福音を朝鮮に伝う。数十年の風霜、その苦しみいかに。心肺は激しくいたみ、皮骨は凍え餓え、手足は痛みそこなわれ、改めず、その生涯は祈祷と感謝なり。わが多くの兄弟を得、同じく主に会し、主の名は栄えを得。その生涯、苦にしてまた栄えなり。臨終の口に朝鮮兄弟のこと絶たず。その骨を朝鮮に残さんことを願う。これわれらの心碑となすゆえん。しこうして主の再臨の日に至るなり」

ハ 上田貞治郎「墓石は質の良い立派なもので、しかも建碑の費用一切をそれほど裕福ではない朝鮮の兄弟らが喜んで負担したことは、いかに朝鮮兄弟らの愛が深いかを示している。ゆえに碑石は冷たい一片の石でなく、燃ゆるがごとき朝鮮兄弟らの心に刻みつけられた愛の記念碑である」

二 日本人は朝鮮で死んでも骨は日本へ持ち帰るのに、日本で死んで骨を朝鮮に埋めた乗松は、いかに朝鮮を愛したことかと同時に人々を驚かせた。日本人の記念物が神社をはじめ根こそぎ破壊された朝鮮で、乗松の記念碑は水原のキリスト同信会の会堂裏の丘の中腹にひっそりと建っている。(写真)

- ⑱ イ 佐藤得二「乗松氏は伝道といっても牧師でも先生でもありません。お互いにヒョンニム（兄弟）と呼ぶ人たちです。これが世間に目立たないプリモス・プレズレンの教えです。乗松氏が朝鮮人を教化したとか、指導したとかいったら、乗松氏も兄弟たちも怒るでしょう。彼が内朝融和のために尽くしたなどというのも見当ちがいの評言です。彼はキリストのことばに活かされ、韓国の兄弟たちを慰めに行き、朝鮮人になり切って死んだのです。貧しい兄弟たちの負担になるのが苦しくて日本に帰って死んだのです」

口 詩人：李烈 「…乗松兄弟は、韓国の独立運動に反対することも、日本統治に協力することもしませんでした。彼は当時、植民地統治下で望みを失って生きていた韓国の人々に、この世のくよりも永遠のみくに、朽ちゆくいのちよりも永遠のいのちの福音を伝道することを使命として、34歳の年に韓国へ単身やってきて、結核にかかり59歳で世を去るまでの25年間、だれよりも韓国の人々を愛して、キリストの愛をみずから実践した偉大な信仰者でした…」

※ … … … ※ … … … ※ … … … ※ … … … ※ … … … ※

◎第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白 「…わたくしどもは〈見張り〉の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し…、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と、兄弟姉妹、…ここからのゆるしを請う次第であります。

……1967年 総会議長 鈴木正久」

◎明治学院の戦争責任・戦後責任の告白 「私は、日本国の敗戦50周年にあたり明治学院が先の戦争に加担したことの罪を、主よ、何よりもあなたの前に告白し、同時に、朝鮮・中国をはじめ諸外国の人々の前に謝罪します。……1995年 明治学院学院長 中山弘正」